



「あの方は本当によみがえられた！」

忍ヶ丘集会協力牧師 神崎 伸
(日本福音ルーテル神戸教会牧師)

「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。」

(ルカによる福音書 第 24 章 5-6 節)

神学生の頃、他教派研修で東方教会に属する日本ハリストス正教会の復活祭に参加したときのこと（東京復活大聖堂）、信徒のひとりが「ハリストス（キリストのこと）復活！」と声をかけると喜びをもって「実に復活！」と言葉を返す。——復活の祝いの日、その挨拶が飛び交い礼拝堂を満たしました。忘れ得ぬ体験です。

空の墓に天使の声が響きます。それは、私たちが問う声です。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか」。主イエスは墓の中に閉じ込められていません。主は過去に閉じ込められていません。主が復活されたとは、今も生きておられる、ということです。主は今、生きて私たちを助け、励まし、導き続けていてくださる。「あの方は、ここにはおられない」、墓の中にはおられないのです。それなのに、私たちのほうは、そのことをしばしばすっかり忘れてしまいそうになるのです。復活よりも死の力が、神よりも人間の暴力が、神の赦しよりも私たちの罪が、神の憐れみよりも自分のこころの傷が、大きいと勘違いをしてしまうことがあるのです。「思い出さない」、主イエスの言葉を思い出さない！幾度も礼拝で、聖書から聴き続けてきた言葉を思い出せ、というのです。そこにこそ私たちのたしかな現実があるからです。

わたしは、キリスト者の幸いとは主イエスの言葉を思い出し、想起しながら生きてゆく

ことができる、この一点にあると信じます。

主の十字架前夜の、ペトロがそうでした（マタイ第 26 章 74-75 節）。鶏が鳴いたとき、彼は誓いの言葉を思い出し、それを守ることができなかった自分の弱さを悲しんだではありません。「イエスの言葉を思い出し」たのです！ わたしが知らないわたしを主は知っていてくださった。その主が、わたしをゆるしの光の中に置き、死へ赴こうとしている——。そのことを知って「激しく泣いた」のです。

私たちもそうです。憎しみに燃えてしまったときに、「敵を愛しなさい」とおっしゃった主イエスの言葉を想起こそすのです。ほんとうに疲れ果ててしまったときに、「誰でも重荷を負う者はわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」という主イエスの招きを想起こそすことができるのです。悲しみがこころを去らないとき、「悲しんでいる者は幸いである」と、またこの世にある不正や暴力に対して臆病になり始めているときに、「平和を実現する者は幸いである」という主イエスの祝福を想起こそすことができるのです。こころが怯えているときに、「勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」という主イエスの宣言を、死の前には「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない」という慰めと希望を——。私たちは、いつも、いつでも、どんなときも、主イエスの言葉を想起こしながら生きることができる！

復活。それは世界史の中で主イエス・キリストだけに起こったことです。説明されて納得できることではないでしょう。福音書もま

た説明しようとしません。この声を聞いた女性たちは、使徒たちの前でただ繰り返した。「キリスト復活！ 実に復活！」。私たちもまたそれに応え、この言葉を繰り返しながら生きてゆきます。こころの重い日に、小さな声で、しかしきっぱりと口にしてください。「キリストはよみがえられた！」。重い雲が垂れ込める日に、先行きが見えない日に、自分に語

ってください。「あの方は本当によみがえられた！」。そのときに、新しい光が差し込みます。イースターおめでとうございます。あなたのために、私のために、世界のために、主はよみがえられました。



「入居者主体の趣味の会がはじまりました」

ケアハウス 柏村 登代子

コロナ禍以降、お客様同士の交流の場が激減しており、ケアハウスの事業計画に「活気と潤いのある生活」という目標を掲げ、趣味の集まりが定期的に行えるための取組を始めました。「手芸・編み物」「コーラス」という声が多く上がり、この二つの会が発足しました。最初の集まりでお客様自らが活発に意見を出し合い、具体的な活動の日時が決定しました。

「コーラス」は入居者のS様が中心に歌を選曲し、歌詞の印刷や製本もスタッフと参加者の方々で行いました。S様は40年間、音楽の教師をされておられたというベテランの音楽家です。声を出して好きな歌を歌う事や、皆と一緒に過ごす時間を大切にしたいという思いから協力してくださっています。活動中は、元気で楽しい歌声がピアノの伴奏と共に聞こえてきます。そばを通るスタッフも楽しい気持ちになり、元気がでて、いつの間にか一緒に口ずさんでしまいます。

「手芸・編み物」の活動では、参加者の経験や目標は様々です。手を動かしながら、今まで顔を合わすことが少なかった方とも、興味のある作品の話題に花が咲き、新しい交流も生まれました。一つ作品を仕上げると、すぐに次の作品に取り掛かかれ、高い創作意欲に驚くばかりです。

また、聖書カバーを新調して下さるチームもありました。裁断・アイロンがけ・ミシンという工程ごとに、それぞれが出来るところを分担し、効率よく作業を進めておられ、とても素敵に仕上がりました。

活動が進むと、「いろんな材料を買いにいきたい」といった意見もあがりました。これを受けて、「買い物ドライブ」が実現しました。

お目当ての毛糸や生地を見て回り、楽しくお買い物をされていました。店内を見て回る内に、次の作品のヒントが見つかり、店員さんにじっくりとアドバイスをもらっておられる方もいらっしゃいます。新しい世界が広がるような出来事でした。

「入居者主体の趣味の会」に取り組むことにより、お客様の思いを伺う機会を持てたことは、支援に関わる際のお客様との関係性の構築に大きく役立つと感じています。スタッフも関わることで、先生役として調べたことをお伝えしたり、生徒になって教えて頂いたり「支えられつつ支えて」という理念を実感できる機会となっています。今後も、お客様の希望に沿った主体的な趣味の会が展開され、自立支援に向けた活動となるよう継続していきたいです。



理事長コラム「ジョージのつぶやき」

理事長・チャブレン 大柴 譲治

「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる。」(マタイ 4:4)

2022年8月25日から9月3日まで松本義宣先生と共にドイツのブラウンシュヴァイク州立教会(EKLB)を訪問してきました。私にとっては4年振り、3回目のドイツ訪問です。前は2018年秋にJELC-EKLBとの宣教協力50周年を記念して総勢20人ほどで訪独しました。

ELKBは釜ヶ崎にあるディアコニアセンター・喜望の家の働きを、その創始者であるエリサベス・ストローム宣教師(1922-2022)以来50年にわたってずっと支援し続けてくださったのです。るうてるホームの理事の一人である秋山仁牧師(豊中教会、喜望の家)は6年間ドイツでアルコールセラピストとしての訓練を受け、資格を取って帰国されています。

2018年の訪問時にはるうてるホームからも他に4人のメンバーがいました。その際に国賓級の歓待を受けたことは忘れられない体験でした。2020年からCOVID-19パンデミックが始まったために中断されていましたが、海外との交流も少しずつ再開されています。北米、北欧フィンランドやノルウェー、アジアの諸国など、ルーテル教会のグローバルネットワークを生かした職員研修の機会は今後も展開されてゆくことと思います。

今回はELKBが宣教師派遣等を通して関わりを持ってきたナミビア、インド、日本の三カ国の代表が招かれた宣教支援会議に出席してきました。会議の合間を縫って松本先生と二人で、ルター(1483-1546)が宗教改革を行った町であるウィッテンベルク、ルターの生誕と逝去の地アイスレーベン、22歳の若きルターが落雷体験を通して修道院入りを決意したシュトッテルンハイム等に足を運ぶことができました。ウィッテンベルクではルター記念館となっているルターハウス、メランヒトンハウス、町教会、城教会、ルターガーデン

(宗教改革500年記念に植樹された木々が5年経って小さな森になっていました)、LWF(世界ルーテル連盟)のウィッテンベルクセンタ

ーを含め、百聞は一見に如かず、でした。私にとっては初めて訪問する地で500年前のルターやその家族、友人たちの息吹きを感じながらのルター派牧師としてのアイデンティティ確認の旅となりました。

今回の旅には恩師である徳善義和先生の『マルティン・ルター ～ ことばに生きた改革者』(岩波新書、2012)を持参。徳善先生は今年の1月3日に90歳で天の召しを受けられています。

主イエス・キリストの現臨に捉えられて「我ここに立つ」と告白しながら神のみ言葉の上に立ち続けたルター。私たちもまた、神の口から出る一つ一つのみ言葉に生きる者とされてゆきたいと念じています。



落雷体験に遭遇した若き日のルターを演じる松本義宣先生

後援会ご献金感謝報告

2022年11月19日から2023年3月26日までの献金総合計は、964,177円ございました。多額のご献金に感謝申し上げます。

今後とも皆様のご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

編集後記 ●●●●●●●●●●●●●●●●

今年の桜は例年より早く咲いたようです。皆さまの地域ではいかがでしょうか。出会いと別れの季節ではありますが、毎年イースターの時期と重なることで「新しい自分との出会い」に期待しています。コロナ禍によって分断、縮小された人間関係が少しずつ回復し、新たな出会いや人と人との関わりの大切さを実感できる時を待ち望みたいと思います。（石）

発行所 575-0002 大阪府四條畷市岡山五丁目19番20号

TEL 072-878-9371 FAX 072-878-5293

メールアドレス jimushitu@ruuteruhome.or.jp

振込口座番号 00910-1-41037 加入者名 社会福祉法人るうてるホーム

発行責任者 大柴譲治